

法然上人二十五霊場と大坂講

山 本 博 子

はじめに

近年までの法然上人二十五霊場の研究は、霊沢の『円光大師遺跡廿五箇所案内記』（以下『案内記』と略）のみを史料として解明されてきた。例えば、伊藤唯真博士は「近世における法然上人遺跡巡拝について」の論文において、『案内記』の序の記述から、「霊場二十五箇所の選定自体は霊沢自身が行なった」「案内記をつくって、巡拝の催しを勧め、霊場巡拝普及の端をなした功績は、ひとり霊沢に帰せられるべきものである」とする⁽¹⁾。しかし、筆者は二十五霊場の濫觴が、延享四年（一七四七）以前に成立の大坂の「円光大師廿五所廻」（以下「廿五所廻」と略）であるとする新たな見解を示した⁽²⁾。本稿では『案内記』を精査し直し、詠歌額・札所標石・道標などの遺物により、遺跡二十五箇所の札所選定や巡拝の普及と発展に大きく関与した大坂講について明らかにしたい。

一、札所及び番付の選定

霊沢は『案内記』で、久美浜本願寺の詳細な道順や縁起、詠歌額などの存在を記しているが、「番外、廿ばん京のせいぐわんじとかわる」「はんくわいにせしも、大坂こうしゆゑんほうゆへ、はぶきくれよとありしまゝ、ぜひなく、ばんぐみに除ぬ。作者が心にあらざ」とする。霊沢が本願寺を札所と考えていたことは、「第廿番」「発起沙門岸誓」の文字を含む詠歌額が現存することで分かる。また、黒谷青龍寺も「番外の第一ばん」「我宗根本のれいちななれば、かならずじゆんはいあるべし」としながらも、「当山をばんぐわいにせしハ、作者の本意にあらざ」とする。また、「かうや山をばんぐわいにせし事ハ、此作者到彼岸がこゝろざしにそむけども、女人けつかいの所ゆへ大坂のこうしゆのねがいにてはぶきし」とし、青龍寺や高野山が大坂講衆の意向により番外となったことを吐露する。

札所番付に關しても、凡例では「かつてに^(順)じゆんぎやくを^(逆)

いわず、まわるべし」とするが、②誓願寺（数字は札所番付、

以下同じ）から、「廿二ばんの浄花めんへ行が、じゆん路なり」

とし、②勝林院の次に「百万へんへしゆんはいするか、しゆ

ん路なり」とするなど、靈沢が考えた番付は②清浄花院↓②

勝林院↓③知恩寺の順となる。靈沢の意図と異なつたのは、

「大坂のこうしゆのおもふハ、四かの御ほんさんハしだいに一

所にまわり其ばんの内へよじをませがたしといふ。それゆへ

こ、〔誓願寺〕よりおはらへ行^(道)みちゆきもどり大成らうはん

なり。じゆんれいゑいかもしだいふとうになりし。ただ、

ぞくのこゝろにしたがふ」と記すように、大坂講衆の意向に

従い、四箇本山（②知恩寺・③清浄花院・④金戒光明寺・⑤知恩

院）を續けて巡るようにしたため、前もつて決めていた番付

と詠歌が矛盾したのである。このような例は、⑩香久山法然

寺の詠歌額にも見られる。「第十番」「廿五靈場巡拝発起沙門

到彼岸（靈沢印）」などと刻むが、番付の「十」の文字の下

の「二」の文字を削つた痕跡がある。しかも、『案内記』には、

⑨当麻寺奥院の項に、「是より第十一番、かくやまはうねんじ

へまいるが、じゆん路也」とあり、詠歌額の痕跡と『案内記』

の記述が一致する。これは札所が⑩香久山法然寺⑪龍松院で

あるにもかかわらず、矛盾した記述が抹消されなかつたため

に、靈沢が最初に考へていた札所を知り得る一例である。

このように『案内記』に示す札所や番付は、靈沢独自の選

定ではなく、大坂講衆の意向が強く反映しており、少なくとも

も靈沢が最初に決めた札所や番付とは相違する。ただ、札所

や番付は、靈沢が『案内記』の序でいう「せんじゆの

どうぎやうにんに、あないせんと、一小冊」を作る前に、大

坂講衆の意向で訂正した場合と、「一小冊」に記された札所に

基づき巡拝した後、大坂講衆の意向で訂正したものが『案内

記』に示すものである場合が考えられるが、確定する史料を

持たない。

二、大坂講の活動

大坂講の活動については、すでに梅溪 昇博士の「法然遺

跡寺院としての如来院の活動」の論文で説明されているが、

それとは重複しないものを挙げておく。

A 詠歌額を掛ける。①誕生寺・②讃岐法然寺・⑥光明寺・

⑦二尊院には、無紀年の大坂講中の詠歌額が現存する。

B 札所標石・道標の建立。建立の最も早いものは、⑩香久

山法然寺の宝暦十三年（一七六三）九月の札所標石で、弘化

二年（一八四五）十一月の香久山法然寺の道標（桜井市玉列神

社）まで、無紀年のものを含め二十余基が確認でき、靈場巡

拝初期から大坂講が数多くの札所標石や道標を建立したこと

が分かる。

C 遺跡再興のための捨財寄付。③十輪寺の御影堂前に、「大師自面贊寶瓶影」「寄進大坂構中」と刻む無紀年の碑がある。『十輪寺歴代記』（十輪寺蔵）の第二十一世安空東益の後に入寺した圭道良迪（万治三年（一六六〇）→天和三年（一六八三）在住）の項に、寺中七箇院と香衣の争論による坊舎破壊、宝物・諸記録紛失の記述があり、また、『案内記』にも御影の記述がないことから、『案内記』作成当時には御影はなかったのかもしれない。第三十三世見空律賢（明和二年（一七六五）→安永六年（一七七七）在住）の項に、「御影堂宮殿再興」とあることから、御影寄進の時期は明和二年以降とも考えられる。

D 図書の出版。大坂本屋仲間の記録である『開板御願書控』^⑤によると、宝暦十四年（一七六四）三月に「諸国順拝二十五箇所」、同年六月に「諸国順拝廿五ヶ所／元祖円光大師御遺跡詠哥」の願書が出され、とくに同年十二月（明和元年）には、『案内記』に「行脚発起助縁講頭連衆」として名前が出る亀屋浄正・助松屋道喜作の「諸国順拝廿五ヶ所道中記」の願書が、瀬戸物屋伝兵衛を開板人として出される。翌明和二年（一七六五）九月には、助松屋道喜作の「諸国順拝廿五ヶ所道中記」（以下「道中記」と略）の願書が、瀬戸物屋伝兵衛（病気につき、代理として同伊兵衛）を開板人として出される。ところが、なぜか同時に、泉州堺の岸誉（霊沢）作の「浄土元祖恵成大師御遺跡巡拝案内記」の願書が本屋又兵衛を開板

人として出されたため、本屋行司は、両本を類書とみなし、助松屋道喜のものは縁起の入らない小冊の道中記として、霊沢のものは大冊の道中記として開板を認めた。助松屋道喜作「道中記」のその後の経緯は不明である。ただ、寛政二年（一七九〇）改正の「板木総目録株帳」^⑥、文化九年（一八二二）改正の「板木総目録株帳」^⑦、明治三年（一八七〇）以前作成の「書籍分類目録」^⑧に、その書名が見られるので、おそらく出版されていたと思われるが、残念ながら管見に触れない。

E『案内記』の②勝林院の項に「講衆宿坊普賢院」とある。巡拝講の宿の記述はこの箇所だけであるが、大坂講には他にも指定の宿をもっていた可能性も考えられる。

三、大坂講の組織

大坂講の組織を解明する史料は皆無に近い。ただ、②知恩寺札所標石には「発願人／亀屋浄正／助松屋道喜」と、②金戒光明寺札所標石には「大坂発願人／亀屋浄正／助松屋道喜」とある。また、②勝林院道標には「大坂巡拝講」「講元／浄正／道喜」とあり、⑦一心寺札所標石には「元祖巡拝大坂講中」「講元／亀屋浄正／助松屋道喜」とある。知恩寺・金戒光明寺の「発願人」を札所標石建立の発願者とするのか、廿五箇所巡拝の発願者で、かつ札所標石の建立者とするかは軽々には判断できない。しかし、宝暦十三年（一七六三）九

月の⑩香久山法然寺札所標石に「大坂講中」とあるので、この時期には巡拝講が成立していたことが分かる。ただ、明和四年（一七六七）の①誕生寺札所標石には、講元を決定していなかったためか、道喜を「世話人」と表記している。明和五年（一七六八）の②勝林院の道標以降、安永四年（一七七五）の⑦一心寺の札所標石までは、明らかに亀屋浄正・助松屋道喜を講元とする大坂講の名前が確認できる。しかも、④金戒光明寺札所標石には「世話人中」として十三名の名前を刻むことから、大坂講はかなり大きな組織と考えられる。また、無紀年の②知恩寺札所標石には「大坂東組講」、文化六年（一八〇九）の⑤勝尾寺二階堂の灯籠には「大坂南講」と刻まれているので、巡拝開始から約五十年後には、大坂講の組織がさらに拡大していたことが窺える。文化八年（一八一二）の⑪東大寺勧進所（龍松院）の札所標石以降で大坂講の名称が確認できるのは、弘化二年（一八四五）十一月の⑩香久山法然寺の道標だけであるが、少なくとも大坂講は巡拝開始から約八十年以上存続していたことが分かる。しかも、これら札所標石・道標に刻まれる名前には、霊沢の名は一切なく、『案内記』に記す亀屋浄正と助松屋道以外の「行脚発起助縁講頭連衆」の名も見えない。これらから、「行脚発起助縁講頭連衆」が大坂講であるとする梅溪博士の考え方は、見直さなければならぬこととなる。

大坂講の講元となった亀屋浄正と助松屋道喜の人物像については、すでに梅溪博士が推定している^⑩。ところが、両名の住所を『案内記』では靱とするが、『開板御願書控』^⑪では、亀屋浄正は京町堀、助松屋道喜は新天満町と、より詳細な住所を示す。さらに③十輪寺の御影堂前にある大坂講寄進の「大師自画賛寶瓶影」の碑石台座裏面には、「構頭大坂／助松屋與兵衛／法名 道喜／同 亀屋三良右衛門／法名 浄正」とあり、両名の俗名が確定できる。助松屋與兵衛に関しては、寛政十一年（一七九九）の「手形便覧」^⑫に名前が見えることから、両替商であったと考えられる。また、⑭黒谷金戒光明寺に刻む大坂講の世話人十三名の中では、大和屋勘兵衛は文化三年（一八〇六）の酒蔵高の二千石に、丹波屋平右衛門は同じく一千石として名が見える^⑬。ともかく有力な大坂商人が講衆に含まれていたことは明らかである。

四、大坂講と霊沢

大坂下寺町の源聖寺には、「大坂／円光大師廿五箇所」「第十八番 源聖寺」「施主／亀屋三良右エ門／助松屋與兵衛」と刻む無紀年の札所標石がある。これは延享四年（一七四七）以前の成立の「廿五所廻」の札所標石とは考えられないが、施主名は霊沢と遺跡二十五箇所を巡拝した浄正・道喜の俗名と同じである。「廿五所廻」は『大坂寺社順拝記』（明和九年

なつたと思われる。

おわりに

以上、遺跡二十五箇所（遺跡）の札所及び番付の選定は、靈沢独自のものではなく、大坂講の意向が大きく取り入れられていること。大坂講は遺跡二十五箇所（遺跡）の巡拝の発展のために、靈沢が『案内記』を出版する以前から、詠歌本・道中記の出版を企て、札所寺院への法然の御影の寄進や、札所標石・道標の建立、詠歌額を掛けるなど、積極的に活動を展開していること。大坂講は『案内記』に記す僧俗からなる「行脚発起助縁講頭蓮衆」の講衆ではなく、その中の亀屋浄正（三良右衛門）・助松屋道喜（與兵衛）を講頭とする大坂商人を中心とする大きな組織であつたことが指摘できる。

（二七七二序）においては、「円光大師廿五形」と表現され、遺跡二十五箇所をモデルとした（うつし霊場）に変化するが、既存の「廿五所廻」を（うつし霊場）に変化させ得たのは、「廿五所廻」に関わりをもつていた亀屋三良右衛門・助松屋與兵衛であると考ええる。靈沢は『案内記』の序の凡例で、「御（遺跡）ゆいせき、廿五か所にハかざらねど、かの（標）れうごんきやうの廿五（通）もんづうと、いふことになぞらへ、あまたの中よりゑら（選）みいだしぬ」とし、あたかも自らが二十五箇所の札所を選んだように記すが、実際に『案内記』に示す札所及び番外の合計数は五十を超える。亀屋三良右衛門と助松屋與兵衛は、靈沢の遺跡巡拝の発願に援助を求められ、巡拝に賛同しながらも、すでに大坂にある「廿五所廻」との整合性を求めるが故に、新設の札所を二十五に限るべきことを主張したと思われる。法然の遺跡巡拝を計画したのは、師の廓營の遺志を継いで遺跡巡拝を願っていた靈沢であろう。実際に遺跡巡拝を計画する過程で、経済的援助を得るためにも、すでに大坂にある「廿五所廻」に関与していた亀屋三良右衛門や助松屋與兵衛を誘い、法然の遺跡巡拝を要請したと考えられる。つまり、当初靈沢が計画した法然の遺跡の巡拝は、二十五箇所に限定していなかったが、巡拝を継続し、霊場として機能させるためには、在俗信者を取り込む必要性から、大坂講衆の意見を大きく取り入れ、最終的に『案内記』に示す二十五の札所と

1 『仏教文化研究』第二〇号三〇四頁、昭和四九年刊。伊藤博士は、『案内記』の序や跋から、靈沢が宝暦十二年（一七六二）四月に遺跡巡拝に旅立ち、途中伊勢神宮に聖跡巡拝講社の結成を祈願し、同年十二月以降に巡拝の同志を募つて、翌宝暦十三年四月八日講衆を連れて聖跡を巡拝したという。

2 拙稿「大坂の法然上人二十五霊場―その成立と展開―」（『中外日報』平成一四年二月一〇日付）及び「円光大師二十五所廻」（『宗教研究』三三五、平成一五年刊）参照。この「廿五所廻」は「円光東漸大師廿五所御影順拝」とも呼ばれ、主として

寺町の浄土宗寺院を巡るもので、法然の御影を札所本尊とする〈本尊巡礼〉である。靈沢や大坂講が巡拝した「遺跡二十五箇所」は〈聖跡巡礼〉であり、巡礼の性格は違いますが、札所数は同じである。

- 3 靈沢は『案内記』や⑩香久山法然寺・⑫勝林院の「詠歌額」において、自らを「到彼岸」と号している。そして、『開板御願書控』第十五冊によると、『案内記』は、泉州堺の「岸誉」を作者として「浄土元祖恵成大師御遺跡巡拝案内記」の開板願を出し（『大坂本屋仲間記録』第一七卷五六頁）、改題許可を得た後に上梓されていることから、靈沢の誉号は「岸誉」と推察できる。また、『案内記』の西光寺法誉の「聖蹟巡拝行程記跋」の中には、「洛陽放光山前主靈沢上人」とあり、靈沢が放光山（如来寺）の前住職であることが分かる。靈沢は『案内記』序で、如来寺前住職であった廓誉の弟子であると記すが、藤堂恭俊博士によれば、如来寺の過去帳には歴代の廓誉の戒名やその弟子の戒名を記すが、靈沢の名は無かったと報告している（法然上人二十五箇所巡拝に関して『東山学園研究紀要』第一八集七頁、昭和四八年刊）。ところが、知恩院日鑑の享保十七年（一七三三）三月二十五日の条には、廓誉の弟子の「岸誉順也」が、廓誉入寂後の如来寺の後住に就任している記述が見られる（『知恩院史料集』一三卷三二七～三八頁）。この「岸誉順也」が靈沢と同一人物である可能性は高いが、なお検討の余地がある。
- 4 『藤堂恭俊博士古稀記念浄土宗典籍研究篇』八八四～八九五頁、昭和六三年刊。そこでは、①詠歌額を掛けたこと、②丁石を立てたこと、③遺跡再興に捨財寄付したことを挙げ、とくに大坂講の如来院での活動を紹介する。

法然上人二十五霊場と大坂講（山 本）

- 5 『大坂本屋仲間記録』第一七卷一九、二四、三六、五五、七三、七四頁。
- 6 『同』第二卷二六九頁。
- 7 『同』第二卷四九三頁。
- 8 『同』第一卷三三一頁。
- 9 註4の八八六頁。
- 10 註4の八八六頁。梅溪博士は、講中の亀屋浄生は新鞆町の両替商・干鯛塩魚売捌兼帶商人の亀屋伊兵衛で、助松屋道喜は助松屋忠兵衛・同平蔵・同新四郎・同三郎太郎・同利兵衛などの両替惣仲間の一軒か、またはその縁戚とする。
- 11 『大坂本屋仲間記録』第一七卷三六頁。
- 12 『大阪商業史料集成』第五輯二三〇頁。
- 13 『至享文記』『大阪市史史料第二四輯』七八、八二頁。
- 14 註2の拙稿参照。

〈キーワード〉 法然、二十五霊場、靈沢、大坂講、札所標石、道標、詠歌額

（佛教大学職員）

144. Dōgen's Concept of the Word "Buddha Nature" in the *Busshō* Fascicle of the *Shōbōgenzō*

Kiyozumi ISHII

In this paper, I would like to confirm how Dōgen defines the word *Busshō*, or Buddha Nature, in the *Busshō* fascicle of the *Shōbōgenzō*. I conclude that the word *Busshō* has a meaning similar to the word *Daigo*, or the Great Attainment, in the *Daigo* fascicle of the *Shōbōgenzō*. It indicates the attribute of the whole world as Buddha, and its individual emergence as any phenomena could be called *Shujō*, or Sentient Being. Though this definition might be unique in Buddhist thought, it is a specific aspect of Dōgen thought.

145. On the Economic Ethics of Suzuki Shosan

Akira KASAI

The purpose of this paper is to consider the economic ethics of Suzuki Shosan. Economic ethics means vocational ethics, and Suzuki explained vocational ethics in his main published work *Banmin Tokuyō*. His vocational ethics was based on the principle that worldly things are Buddhism. He looked on one's vocation as the other self of the Buddha. Every vocation as training improves one and relieves his mind. There is a Japanese vocational ethics. It continues living in the Japanese mind.

146. The Twenty-five Historical Holy Places of St. Hōnen's Activities and the Ōsaka-kō

Hiroko YAMAMOTO

In research up to now, it was thought that the twenty-five historical holy places of St. Hōnen's activities were established and pilgrimage developed only by the effort of the priest Reitaku. However, in Reitaku's own "*Guide book to twenty-five historical holy places related to the great master Enkō*"

it is recorded that concerning the choice of the pilgrimage temples and the way of numbering the temples he inevitably followed the suggestion of Ōsaka-kō. Ōsaka-kō was a group of pilgrims and their leader was a merchant from Ōsaka. Ōsaka-kō donated pictures of St. Hōnen and pilgrim songs to the temple, published books of pilgrim songs and erected many memorial stones and signposts. In this way, Ōsaka-kō contributed to the establishment of the twenty-five historical holy places of St. Hōnen's activities and to the development of this pilgrimage.

147. Consciousness of the Sect Name in Nichiren Buddhism: A dispute in Okayama.

Senshō SAKAWA

In the eighth year of Kansei (1896) occurred an incident between the Okayama clan and Nichiren sect temples concerning the name of the sect. The Okayama clan tried to forbid the use of the name Hokeshū as the sect's official name. However, in the face of the objection of Nichiren sect, they gave up their efforts. The Nichiren temple of those days considered the appellation Hokeshū to be extremely important.

148. Kiyozawa Manshi's *Genzai-anjū* (Peaceful Settlement in the Present Time): Consideration of its aspect of time

Yūsetsu NISHIMOTO

The purpose of this study is to clarify the aspect of time in Kiyozawa Manshi's *Genzai-anjū*. In the early part of my study, I refer to the criticism of Soga Ryōjin against Kiyozawa's *Seishin-shugi* (Spiritual Activism). The main point of the criticism by Soga, in short, is the lack of the practice of compassion and the norm of conduct for the future in Kiyozawa's *Genzai-anjū*.

In the second part of this paper, I consider "*Seishinshugi-to-sanze*" as Kiyozawa's reply to the criticism of Soga. Kiyozawa responds to this criticism,